



叢書



服部文庫  
117  
43  
2



117  
43  
2

一古義堂遺書總目

一將軍上意之寫

一於安物語

一徂徠先生答言

一白石先生詩範

一新莊侯藩中江申渡書

一唐詩選解

一於於若若

一於於十於於

一於於於於於於

古義堂遺書總目叙釋

古學先生夙志孔孟之道篤信程朱氏  
之成說將率其言踐其行而直泝洙泗  
之淵源試之躬行求之事實多歷年所  
矣爾後恍焉獨得始知宋朝儒先之說

有詭聖人之真脉、遂著二書、古義等之  
書、以闡發孔孟之遺訓、源頭既立、流派  
隨分、益非羽翼經著書、則不能詔諸天下  
後世之人矣、非辨訛斥非、則不能鋤榛  
蕪、荒穢之塞矣、豈世之締句繪章者之

比乎、紹述先生述趨過之訓、研究尋  
討、膏油繼晷、益加精微、以羽翼異先說、且  
爲初學晚生、著國字之經解、及文法之  
書若干、作之與述、皆無非所以闡釋聖  
猷、鋪昭古學也、故今父祖所著撰、其書

滿屋善韶不肖幼而孤及年稍長常以  
校訂遺文爲任殆垂二十餘年業漸就  
緒卷帙略分因爲子弟輩記書號且奉  
讀振端詳成書之前後凡所有遺書既  
刻而行于世者未刻而傳寫者及未成

書而收于家者舉皆錄之以著古義堂  
遺書總目叙釋一卷并附載刊板之所

藏爾

時

明和六年己丑夏五月十二日

伊藤善詔謹識

古學先生遺書

論語古義

十卷

文會堂奎文館藏板

孟千古義

七卷

本堂藏板  
文泉堂發行

中庸發揮

一卷

同上

大學定本

一卷

同上

童子問

三卷

文泉堂藏板

語孟字義

二卷

同上

此書有介紹述先生校本今收于家以俟他

日之改刻定本發揮及字義

文集

六卷

本堂藏板  
文泉堂發行

詩集

二卷

同刊布于世

周易乾坤古義附大象解

一卷

春秋經傳通解

二卷

仁齋日札

極論

讀近思錄抄

合一卷

右五品未成書哀集為別集四卷又有和歌集一卷送水野侯國字序一篇文式二卷共未刊行

自稱原本題曰健健... 卷新稿九卷後有不復名者因卷享保丁未之歲有人請騰寫全集于時先子自選文數十篇且分部類後甲寅之歲安原伯亭氏在... 皇亦請騰抄全集焉先子再選使以贈...

日之改刻疑於...

文集 六卷

詩集 二卷

周易乾卦古義類...

春秋經傳...

仁者何...

...

...

紹述先生遺書

周易經翼通解

文集

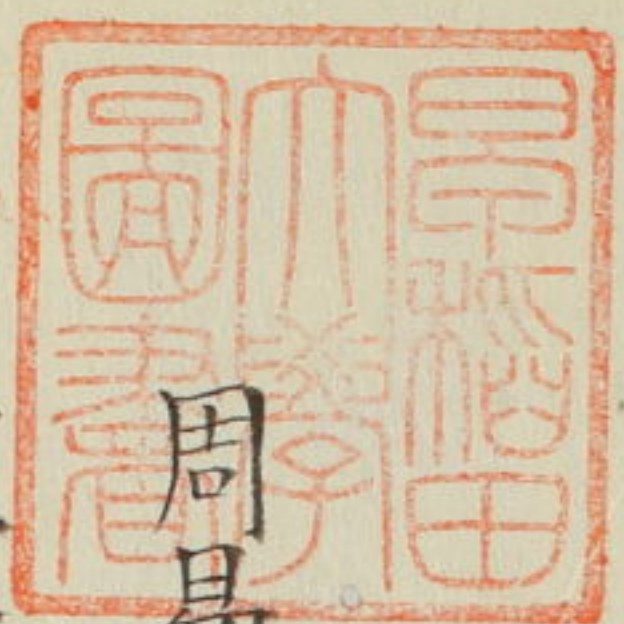
十八卷

二十卷

本堂藏板  
文泉堂發行

本堂藏板  
文泉堂發行

自輯原本題曰慥慥齋集前編四卷次編五卷新稿九卷後有不復名者四卷享保丁未之歲有人請謄寫全集于時先子自選文數十篇且分部類後用寅之歲安原伯亨氏在塾亦請謄抄全集焉先子再選使以謄寫是





晚年之所選最可尊信也其有目錄傳于家  
今所刻者用吾季父所淨寫之本凡載集文  
不遺一首悉從部類刊刻竊按前編所載初  
年之文或者卷等恐不滿先子之意當須  
在不刊布于世然而吾輩子弟何敢可簡汰  
省畧遺文乎故今排布先子終身之甲子以  
附載此書之終若夫欲知先作之老少精粗  
以甲寅之選目與甲子照對則庶幾無遺恨

矣他日若有改刻之力題舊名從甲寅之自  
選選後之文悉從類編入其餘自省削雜文  
分名別集或外集亦分部類附本集之後可  
或又分以前編次編新稿晚年之次第各部  
分以部類加自選之記號亦可今所刊行者  
於傳遺文雖無恨然於編輯之間恐有不满  
先意者故今丁寧焉要之議論文則從彼  
亦同從此亦同矣論編輯體裁之間乎哉

詩集

十卷

本堂藏板  
文泉堂發行

原本亦題曰愷愷齋詩草隨賦隨騰計七卷  
亦有甲寅之自選從原本之次第今分以各  
體如近世之例其各體中之次第大抵據所  
作年月之先後記甲子古人之全集或以詩  
賦為首雜改為後今從古學全集之編例以  
詩集為後其卷數通詩文集為三十卷者碣  
文中題曰文集三十卷故爾

復性辨

一卷

東都生白堂  
藏板

勢遊志

一卷

廣文堂藏板

三奇一覽

一卷

未刻

右三部共文集中所編者辨志先全集既刊  
行三奇自為一部之小冊故今集中載目錄  
而別行其文集目錄所載古義等序及自著  
書之序刊于家者注以既刻未刻之字省其  
文別裒集以為文集附錄一卷

古學指要

二卷

玉樹堂藏板

經史博論

四卷

文泉堂藏板

此書 先子在日令門人校刻刻將成而

先子易簣翌年全刊行于世大抵 先子在

日刻既成者歷 先子之讀閱改正如意可

知沒後刻者不能無校者之得失焉須推刊

成之歲月而知其精粗

辨疑錄

四卷

文泉堂藏板

古今學變

三卷

文泉堂藏板

天命或問

一卷

未刻

聖語述

一卷

未刻

原編在集中今別行

經史論苑

一卷

未刻

輯治經八論品士四科等雜文以載閒居筆

錄後甲寅之歲選散載集中後復舊又分以

為一部未立號只題篇首之文名曰治經八

論部今改名經史論苑始有論苑之書後挿入其文於博論中取彼加此耳

讀易私說 一卷 未刻

讀易圖例 一卷 未刻

周易義例卦變考 一卷 未刻

論孟古義標注 四卷 未刻

此先子錄古義上幀者 韶今分而新寫以爲別本名以標注云

中庸發揮標釋 二卷 文泉堂藏板

大學定本釋義 一卷 本堂藏板 廣文堂發行

共 先子自爲書釋義有自序 韶得之於廢

紙中而其文未完

語孟字義標注 二卷 未刻

事同古義標注有義解有語原他日刊行將

分之或改刻字義訂正本日合刻上幀亦可

童子問標釋 三卷 文泉堂藏板

此吾季父分錄上頓者刊布

周易傳義考異

九卷

未刻

此先子錄傳義合刻本之上頓者詔今刻新

寫以為別本其名傳義考異者先子所命

先子將為別本而預立其號也世所傳寫有

東涯先生易說者即此書之未全者耳此書

中亦有義解有語原既名考異則當語原創

去而留傳義之上頓

四書集註標釋

六卷

未刻

事同古義標注

通書管見

一卷

文泉堂藏板

大極管見

一卷

未刻

用字格

四卷

文泉堂藏板

助字考

二卷

文泉堂藏板

此書於助字之考照大備矣然初學人或難

通義趣故詔將補入國字小解而未果

二部有坊間竊刻本

刊謬正俗

一卷

文泉堂發行

原本附載作文真訣真訣往年刻于文林良材中故刻此書於東都時除本真訣其後板大燬焉今年再刻於京師復原本附真訣于後共二卷云

名物六帖

二箋十卷奎文館藏板四箋廿二卷未刻通計三十二卷

器財

先子在日刻成歷自校閱故條款不

紊首尾精細人品近年刻成文字多誤其未刻者人事略全其餘三箋未全備

帝王譜略

五卷

未刻

和漢紀元錄

一卷

未刻

此書即前書所載與年號類聚略同只帝王譜略少作也紀元錄之輯系晚歲故比年號類聚甚盡精索

後漢官制

一卷

未刻

聚

本朝官制沿革圖考 六卷

未刻

三韓紀略

二卷

未刻

朝鮮官職考

一卷

文泉堂藏板

此書本三韓紀略中之一篇也往年韓使來聘之日為人之明韓官林景範抽卷刊刻而今為一部之書行于世他日刊刻三韓紀略

當復舊以為一部

釋親考

二卷

文泉堂發行

盍簪錄

四卷

未刻

盍簪餘錄

二卷

未刻

東涯漫筆

二卷

未刻

此晚年所筆記文穩意深恨未全書他日俟釐正條款出入重複欲以傳于同志姑謹收于家云

間居筆錄

三卷

未刻

屬稿原本十一卷今訂正以為三卷事委述

鄒

本書批序中曰魯今信疑又曰三卷重一  
又有春秋胡傳辨疑二卷初年之漫筆二卷  
經說二卷已丑筆記庚寅目錄各一卷東涯  
談叢二卷共未成書故不敢傳于世

鄒魯大旨

二卷

奎文館藏板

東自此以下皆國字之書

訓幼字義

八卷

本堂藏板  
廣文堂發行

學問關鍵

一卷

奎文館藏板

制度通

十三卷

未刻

此書

先子在日淨寫以校正未卒業而易

簣故今所傳原本條例文字多誤世所傳寫

混淆之甚無若此書

唐官鈔

三卷

本堂藏板  
文泉堂發行

此晚年所草不及自淨書

韶妙年之時既刊

刻校正多誤四五年前覆校訂正

秉燭譚

五卷

本堂藏板  
文泉堂發行



此書與木村鳳梧氏同校校訂甚精

翰軒小錄

一卷

未刻

此書未歷校正近來傳寫于世者亦多誤○

已上國字之書

古今教法沿革圖

一舖

文泉堂藏板

此古今學變之舉大意者於辨宋學之異同有益於學者系晚年之作勿以簡捷草草看過

唐官品圖

一舖

文會堂藏板

明官制圖

一舖

同上

經學文衡

三卷

奎文館藏板

歷代官制沿革圖考

一卷

廣文堂藏板

此明王光魯所著也 先子補散官爵勳明

官序而收之故今錄附遺書之後云

又有家世私記姓林全書文體辨略等書皆不須編載目錄中也人或知之故記焉其餘

瑣細不入著述之目者皆不錄又有全不成  
書而留續補者今既成或未成亦不錄此書  
先子讀書之抄錄名曰紀聞小牘凡三十卷  
非著述之書姑記其目於茲謹而收于家  
先子作文釘冊子屬稿既脫稿又加改竄者  
皆年分收貯今皆見傳于家

右父祖所著書既刻而行于世者未刻而  
傳寫于同志者未成全書而俟校定釐正

者及抄錄者輯補者計開如右若夫未全  
之書有校定之出入有小異同將續書此  
書云時明和六年己丑之夏五月十七日  
伊藤善韶謹識

四書集註大全

五經集註

春秋左氏傳

文章軌範

曩

右四部有 先子之校本曩者并戶冕為讀

書生據校本刻詩經正文頃日書坊松梅軒

等將續刻易書春秋禮記正文是非遺書之

目而校正居多故附記于茲

寬文十年庚戌

夏四月二十八日先生生

十一年辛亥

十二年壬子

延寶元年癸丑

二年甲寅

三年乙卯

四年丙辰

五年丁巳

六年戊午

七年己未

先生時年十歲

八年庚申

天和元年辛酉

二年壬戌

三年癸亥

是年二月廿一日始講詩經

貞享元年甲子

二年乙丑

文集所載文始是年

三年丙寅

四年丁卯

元祿元年戊辰

二年己巳

先生時年二十一

三年庚午

四年辛未

五年壬申

六年癸酉

七年甲戌

八年乙亥

九年丙子

十年丁丑

十一年戊寅

十二年己卯

十三年庚辰

十四年辛巳

十五年壬午

十六年癸未

寶永元年甲申

二年乙酉

先生時年三十

三年丙戌

四年丁亥

五年戊子

六年己丑

七年庚寅

正德元年辛卯

二年壬辰

三年癸巳

四年甲午

先生時年四十

五年乙未

享保元年丙申

二年丁酉

三年戊戌

四年己亥

五年庚子

六年辛丑

七年壬寅

八年癸卯

先生時年五十

世俊君生

九年甲辰

十年乙巳

十一年丙午

十二年丁未

十三年戊申

十四年己酉

十五年庚戌

十六年辛亥

十七年壬子

先生時年六十

世倫君生

善韶生

女子恒生

十八年癸丑

十九年甲寅

二十年乙卯

元文元年丙辰

七月十七日己酉丑初  
刻終時年六十有七

卷畢

上三意之申子

上様法吞隨彼ると仰側の爲呼 上三意の  
は 大綱言は強弱を進有之申元吉生  
の情 身の働身以振るき申や古事よりあき事  
の情 楽をて申加さるるをねんを多しなき事  
なまはおのあまそくはつき候そ尤の事し 予の  
宿理枯情と業とすは一分の業とするわと  
あるも五つきわね申古候のるもそなり 法  
世の乱と忘するて宿理枯情やあつとねん  
人数とあつるも多の事あへん又法士へ弓矢

泡と射とを打ちをまろりする功と試し金銀衣  
袴とさうする第一旗本の士と懐もあま武功と  
するあま試するは貴を義一外伝も存るたま外も  
尺<sup>たて</sup>知<sup>り</sup>た<sup>る</sup>もろりや存る書の方并歴を  
る、<sup>たて</sup>身<sup>は</sup>も<sup>も</sup>同<sup>じ</sup>意<sup>を</sup>られ<sup>ば</sup>を<sup>も</sup>習<sup>ふ</sup>る<sup>事</sup>は<sup>一</sup>紋<sup>付</sup>の<sup>衣</sup>  
教<sup>を</sup>と<sup>は</sup>世<sup>を</sup>常<sup>に</sup>する<sup>に</sup>か<sup>ら</sup>け<sup>ば</sup>所<sup>を</sup>時<sup>を</sup>さ<sup>す</sup>に<sup>骨</sup>髓  
も<sup>て</sup>の<sup>り</sup>新<sup>し</sup>く<sup>も</sup>存<sup>る</sup>に<sup>は</sup>存<sup>る</sup>も<sup>も</sup>成<sup>成</sup>成<sup>成</sup>や  
か<sup>ら</sup>一<sup>直</sup>代<sup>武</sup>侍<sup>也</sup>と<sup>ら</sup>る<sup>に</sup>大<sup>に</sup>名<sup>を</sup>流<sup>す</sup>中<sup>の</sup>也<sup>に</sup>て<sup>も</sup>  
松<sup>山</sup>歌<sup>子</sup>あ<sup>ら</sup>酒<sup>色</sup>も<sup>あ</sup>り<sup>し</sup>後<sup>羅</sup>羅<sup>子</sup>  
備<sup>と</sup>す<sup>て</sup>し<sup>て</sup>樂<sup>を</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>に</sup>松<sup>山</sup>歌<sup>子</sup>の<sup>も</sup>也<sup>に</sup>

りて武士共習ひにかもな一もあ侍の町人の  
とく柔弱なりありするに武侍あまうぬ  
かり籠中の風儀のわい、尺能ありするに、<sup>き</sup>事  
事なれや、予う武勇は好に候約と可い事用  
の費なり不及なり、善政廉直は絶えずと欲する  
あや乞も習ひ、四の法を右藩代の大や名まで帰  
國のその、<sup>き</sup>事<sup>は</sup>理<sup>を</sup>持<sup>て</sup>お<sup>も</sup>い<sup>し</sup>也<sup>に</sup>皆<sup>人</sup>数<sup>を</sup>き<sup>ひ</sup>に<sup>法</sup>  
士ゆまうけ剛流と試ん為成つ、さあて、<sup>き</sup>事<sup>は</sup>と<sup>も</sup>  
ひては、<sup>き</sup>事<sup>は</sup>多<sup>く</sup>民<sup>の</sup>困<sup>窮</sup>を<sup>法</sup>士<sup>の</sup>此<sup>時</sup>武<sup>を</sup>  
と主人の足おの入まことゆりあ、<sup>き</sup>事<sup>は</sup>主人<sup>に</sup>耐<sup>を</sup>



存をばらねるるより下不和を申の時何の用もなき  
き少終に君臣の魚の志なき時に國破きおあはる  
へ一は儲るの知やあは傳る子もや國をばらね  
きいそこの里味深きまたしす國をの棄すしき  
る事なきよしとてぬるへ一は長は不惜身謀  
争てあはとて主地をうへるはや空く福を喰  
てそ職ふとさるる武士あはに征むるの基  
やまを國のあは政をあらねるしきりや  
予天下の道統を継て許す政るともす既  
み老を及ぶといふも未嘗力衰へた士の困

事かといふも居て既に平和あ及し侯約又た法を  
の事なきころや和をたはてし天下法人のあは  
の心は石を昔むるなり然して法國の志は  
あ中乃仕をまて居るるもて故邦の事は  
言まら及日よあお空へ神をたはてし天下と事  
抑する心あるへ一は去るよりして正事議中の法士は  
走なは老を武を修と嗜むるも予は施すの由ある  
へ一は是はあはゆるの國の中はもるる飛と走りす  
へは法やあはるるや法行し予は法世をばらへ  
まらるるの業も併行も時をあつてい働んかつて

有種を進みらば多し打るるもさうも勤て出  
るや美端気よおきてるる一も下奉事とてしる  
未だ一主祈禱多く人の玉わくはるすれを  
科人まで予う身付難うん気持事不敏成  
とんね暫時改るは忘れず清は家をもる水  
の流るるもくはすも細言も天下の玉と成  
事らば臣とてしむゆもねるもさうもはる  
上言はれん隠はる承はる 大納言痛の上  
圖り事しそは昔やちおはし何れは言は  
上言はるか言事さる丁も保わらん進す  
出に

傳ふ一 大納言も隠すさるすよわらん  
身は事もさるはる 大納言痛の上  
上言はるの事は隠はる承はる一も進  
出に

大山と高野 一而借予の御中見  
此世之基之原本之字も享保乙卯二十天

かあん物語  
子供わらまうかあんむむりー物語すまはま  
とらつたえれまの親父と山田吉曆とりあて石  
田治郎少輔ぬまなるーをけの産根子居られ  
しうを厚治郎ぬら謀及のときと義徳園大橋の  
城へ移しも移りて石と洋あるりつとやつしよな  
夜に九つ時を誰ともや男女二三十人程の夜に  
て田中兵部友のしつとあまうと主役をとり  
とりあてするも夜にすまはつしつとあま  
やーぬらうーとあまうしつとあま

家康様より申あつた上野城へむりて戦つ  
たつひるに申あつてしるに、  
申あつた石火矢と申すは、  
城のとらふと申すは、  
石火矢と申すは、  
けりし事と申すは、  
るは、  
へあつた觸て、  
て神崎のあらと、  
あつた、

るは、  
あつた、  
と申すは、  
中へ、  
て賞<sup>ちか</sup>願、  
れと、  
あつた、  
あつた、  
あつた、  
あつた、

まゝのうたをうたはつて敵討をなさうと仰せられたる  
事ゆゑにさしおこされたる事つゝまの娘へいへり  
不意に法師をすまうて秋に申すにふまひり一若  
へ申してまゝいひのうたを死しておどかつていへり  
むごいふるといふおどかつていへり一若の秋親父  
の持入へまゝ又すまうて去るる事  
家康様御存留の御師匠に申されし決のある  
事と申すに御城と遊ばしつゝ御師匠ある一若  
へ申すも後之に御師匠の御おあるまゝ一若の  
諸事へ御まねた事ゆゑに御師匠のおどかつていへり

おどか失ふ事ゆゑに御師匠のおどかつていへり  
親父に申したる事ゆゑに御師匠のおどかつていへり  
水の屏風より梯子と申して釣籠まで下へまげ  
ておどか洗ひまゝの事ゆゑに御師匠のおどかつ  
ていへり人殺し親父と申すに御師匠のおどかつ  
ていへりおどかの御師匠に御まねた事ゆゑに御師匠  
のおどかつていへり一若の御師匠に御まねた事  
ゆゑに御師匠のおどかつていへり一若の御師匠  
に御まねた事ゆゑに御師匠のおどかつていへり  
一若の御師匠に御まねた事ゆゑに御師匠のおど  
かつていへり一若の御師匠に御まねた事ゆゑに御  
師匠のおどかつていへり一若の御師匠に御まねた  
事ゆゑに御師匠のおどかつていへり一若の御師匠  
に御まねた事ゆゑに御師匠のおどかつていへり

こゝをいふが、ちかつかつこよのあむし、まのよ  
南を何きさくく、又子供産根のほろよ、ねよ  
とらつとやれ、親又のねら、三百年のよ、ねら  
まのよ、軍の多て、何るも、不目申るのよ、ねら  
かど、かつ、勿漏用意、の痛、た、し、ひ、ねら  
も、綱文、難水と、治て、かど、かつ、の、ま、よ、足、ねら  
お、山へ、洗、泡、打、よ、糸、よ、ま、よ、ま、よ、の、ねら、業、飯、と  
と、た、り、て、馬、飯、も、持、ね、ら、ま、よ、の、ねら、ま、よ、ね  
飯、と、替、つ、て、か、ど、かつ、の、ま、よ、ま、よ、の、ねら、ま、よ、ね  
す、ま、よ、洗、泡、打、よ、糸、よ、ま、よ、ま、よ、の、ねら、ま、よ、ね

る、よ、こ、梅、衣、ね、ま、よ、ま、よ、ま、よ、の、花、係、の  
帷子、下、あ、る、よ、り、外、は、な、し、の、帷子、よ、ま、よ、の、ま、  
ま、よ、着、ら、る、の、肺、が、出、て、難、水、で、あ、つ、ま、よ、の、ま、  
肺、の、陰、行、ら、る、の、帷子、よ、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、  
ま、よ、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、  
又、産、飯、も、か、よ、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、  
ま、入、物、宿、と、り、あ、る、よ、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、  
衣、類、の、物、好、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、  
ま、い、ろ、の、ね、ら、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、  
中、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、よ、の、ま、

後、小子其者代産根ばつといひ、今も老  
人の若のりより引て當時と糸とん産根とり  
後従よりいけ人より始まり、るるりまの、他國  
の考より通とん山國市法、

たき勝土州親敷より下り浪人土佐ちま山田  
在り後、幅やと長す忠長音とす、わくわく  
雨再後、たまつへ嫁す後、わくわく、山田  
助長音とす、在り、わくわく、お母より、  
冬、甲齡八十、解りて卒す、予、主時、九、  
市、て、た、と、物、信、は、れ、と、安、免、と、り、神、光、

後、其のこ、と、と、や、正、信、の、比、事、既、小、孫、を  
と、集、の、世、の、中、の、費、と、示、は、は、さ、り、  
、此、の、わ、く、わ、く、根、ば、つ、り、わ、く、わ、く、  
、節、も、何、と、の、ま、り、と、世、に、対、し、と、や、り、の、と、と、  
、て、の、わ、く、わ、く、一、勝、も、と、と、と、後、世、の、ま、り、  
、は、せ、い、る、と、孫、を、も、ま、り、と、の、孫、を、も、ま、り、  
、う、ま、り、と、の、ま、り、と、の、ま、り、と、の、ま、り、  
、と、の、ま、り、と、の、ま、り、と、の、ま、り、

た、一、通、事、宜、存、傍、の、ま、り、や、海、人、の、孫、を  
、と、や、不、詳、疑、り、と、山、田、氏、の、免、書、め、り、と、回、

中並らう又直の石符とありて如りたる事あり  
 享保十五年庚申三月廿七日 岩恒書  
 右安治一世以為富強者意欲修乎大乎如  
 勤皇太子第書句劇部若之際所亦少可  
 以取中終を別在于此邊傍者 之為る  
 是之因業以迄是也 吾矣事及小山  
 系如方報後不足録之者不取

東遷基業

海島又此業あるは頼上一平二等三徳四あり  
 一平二等三徳四あり





先何レ下ニ五約ハハ錯雜成章林三辭之体也ト云ルヘキ也此從ハ  
二世ノ類書ニ林正庵ト云物唐李ノ直字玉ヲ所持ト由リ三者之  
ハ也アリ是ニテハウケ聞ヘヨ二約トハ約字ニテハ一也一約トハ一  
一約ノ字ハ字約協和ノ年辰也ナル故一約ノウケ一約ト云フハ飛  
帰ハ約字ニテハ一ハハ約字ニテハ一ハハ一ハハ故二約一約ト云テ  
純固ト云ハ河波歟多何レ五字手所ハ扱文季ノ体ヲ注スル時  
ハ段ヲ隔テ、横ニ連属シテ首ト也法也後世辭ノ体ノ文章約  
字ヲ揃ヘ教ヲ定ムル文法也而ハ秋風辭ニ約一ト云フニハ續テ  
テ又五約一ト云フハ是錯雜成章ト云テ也是楚辭ノ体也ト  
云フ也秋風辭廣武帝ノ作ニ漢ノ文章ニテ後辭ト云ハ楚  
辭ノ体ヲ用タリト云フハ楚辭ハ屈原字玉カ体也滕王閣ニハ  
四約ト云フハ四ノハ一ハハ約ノ待ト云フハ二ハハ一ハハ待ト云フハ古

来流創如斯ニ然ラズ又育カ儒者共ニ約ト云ハハ別々ノ約  
ヲニツキモ先ト心得一ト云ハハ叶約ト云ハハ思致日本ノ簡  
ニハハ也  
文章ノ体ヲ注シ指南ス寸段ヲ隔テ、横ニ連属メ見ルハ獲  
麟解師祝ナトニテハ見テ了スル所

○富春春叟  
田中氏字者吾初事柳決後後辭姓改富名更逸号桐江又  
称春叟則富春山人也後遊京撰終于他田或曰田者非富逸未  
不知然否

富春春徠翁書 文長政略其文又見東海漫海稿 略曰佑容翁 即桐岩原子 家藏王  
天張遺墨先生欲極之以葉其山不肖即轉告公翁不拒余  
見翁之為人高潔好義不輕下人是以不遇於時而掩門讀書嚮  
導初學頗類維掖家且不自足而每作得文就不肖而正焉  
素富清澹有庾懸法帖奇雅可愛者明伯公楷州榮榮懶鳳

洲亦擊其耳也。弟以為其具革器，緹巾手親出納，而懼見女  
之或損華製，自非先生深得拿山之髓，何以見弟之割愛耶？  
雖然，向高亦理學之宗，文章道德為時見重，况其詩流暢  
其字飛動，實為希世之珍。若弟亦可謂多幸矣。以平慨小  
祇園變為菑，牧之教矣。而今心畫得入東海大雅之室，想  
是世貞應無遺恨。之不肖，鄉人，行喻麟公及雪子，以慶祝  
事，麟在滬，冷雪在金山，華與雪相距各兩日程，且暮待會，  
未得之，不肖僻處山中，無可將敬，獻鐵烟管，伏願覽留，詩  
陋甚，若賜鄂斧，幸甚。！  
門下先書生寓與之愛子山富  
逸祥

奉贈鐵烟管，幸甚。

門下先書生寓與之愛子山富  
逸祥

莫笑野人，獻微物，虛心最好，足通玄。抵換如意，背除癢，敲手  
破唾壺，驥欲前夜，羊裘山觀，赫日朝采，鐵篋弄綠烟。  
先生海內文章伯，壽等五雲，深處仙。

送伍容翁道兄袪役之東武

桐江釣客

雲烟應繞筆頭親，多是旧題，更以新君問。貴民語，無說

深山，今有枕書人。

○有子嚴字說

富山人逸

江若水

族入江諱兼通字子微号若水津州富甲人正德辛卯秋韓使東郭嚴  
鏡湖等乘艘連楫津相唱和，有同槎奇賞

奠水見水車

一木隨輪得自由，瓶傾瀉竟無休。帶花捲去三春浪，涵月引  
采千里流。將師曾借軍裡渴，教民民瘵早時愁。斡旋不必借  
人力，啞聲寒古渡頭。

和僧雷濤子讀家書詩却寄

渺茫雲水未歸人，万里相思空慘神。嶺上拈花存老佛，渡頭濯足  
有慈親。六環冒險何辭遠，一鉢隨緣不厭貧。心外從來無別  
法，盍將瓦礫擊叢筠。

以金線烟寄贈李東郭

制正官名礪

採得頭黃已去，節割成金線。一何芬，面前起紛，霧舌

罇徐生曳雲非酒能消詩客恨代茶好睡魔軍多情誰  
咽相思州寄与征人把管董

滕唐沃

氏細并稱二高諱知慎字公謹一字思昭又曰思昭齋主人唐沃其号

奉和五城原記呈遠寄清約清政

秋堂無伴夜沈沈 器備君詞感愛深自愧衰年猶係累寶

城片石不相尋

五城樓上二梁琴 孰激高山流水音明月間吟我既醉醉深雲

千里對君駢

東魯多賀城壺碑帖叙

柔土碑碣之古者那須國造碑今猶然其文又不明也益田地碑今  
無矣其摹本傳于世者多不精良其不足為書家之模範者  
唯與之壺碑世代已古書法不妙揚之國風壯之人觀之尚有義  
和雅與其子義方其友汪定守就本碑上摹勒双鉤之真本迺  
寄書以請一見义和不審遠寄一策題曰多賀城壺碑考中有

影書又有全碑小圖有古書考後有德朝古歌而有义和之跋及

其友弘齋平信忠之審定數百言矣一又得攷之正史而表二

將軍之事實實之古風土記而審雲真人之心書又和之勒豈不

大方乎

古曰土記未出之前海賢以力

松之園石

松多由諱祐之号之園各又曰梅處隱丹波笹山人松平紀州後記室

池一峰

族池永諱榮春字道雲号一峰 以上中書

高之園高

姓高野諱惟嚴字子式号東里一号之園高四大善書六十字書

送南秋月歸朝鮮

姓此名書體字号八初受業因南後就字于美藤彼

南山五月子規啼 死後休林中送客不惜別時欲挽手為之送報不

如歸

以第一号

甚且公疏

姓甚且即稱忠參後改孝八後日忠雄字公疏久飄游于仙其後

將赴白河留別東都諸友

中常杯酒暫相同莫道王門宦路通  
儼擬齊寧供盞吹何論  
楚賦接雄風投采白鷗連城也  
除靈符朱法絕代工  
日望河須  
目送天涯万里一飛鴻  
二首內一首  
滕云參議  
族小舍名宣季世稱羽林家食祿百五十石

寄贈仙臺源子敬

金華東指五雲閑羨子翩  
住此間上國名望人似玉相思

何日挹仙顏

全四首春

現八座宣季書

龍州序

名刺云不係龍公亮字子明号州序或号松菊主人本山城伏水人鄉  
有山以桃花名于海內故又自号桃源漁夫嘗曳裾於竹園大王之門  
有年今也在牛安都下而教授以餬口後亮更美或人之向以文字  
應言序之禮老後隱居東山

右州序年致上ノ名アテハ 龍石坊ノアリニ後孫云以テ有

白石

鳩巢碑文曰朝散大夫新井源公諱君美字在中初名嶼白石其  
号也其先上野人為新田族大炊助又重孫曾新田二郎其別號為僧  
因其所居号荒居禪師覺義其子孫遂以荒居号後又易新  
井以方言同也以明曆三四二月十日生享保十二己五月十九日六十九而卒

中歲遊順庵木先生之門見稱善唐詩

仙臺洞巖先定寄十教詩命鄙評美嘗觀其所畫松  
島岡於今亦得看詩與書真為三絕美何敢贊一辭遂  
賦古風一篇奉答志見于詩

洞巖老人絕世奇能書能畫最能天於多能如有惜輜川  
人去繼之誰在詩名冠唐賢天下奇勝寫輜川画中有詩  
詩有畫妙处相須妙手傳聞說仙臺十二樓蓬萊咫尺可  
求我讀君詩觀君画壁如雲氣起滄洲綵鳳啣得金瑤  
玕側身東望欲報難願將寰瀛圖一幅置我松風五月寒

奉賀洞巖源先生七十生辰三首 第一首

仙真望上五城樓河上仙翁向此留違寄人間誰老曲

長生何必訪丹丘

碑銘

佐容翁多寶成古瓦銘碑

金玉具相 如圭如璋 德音無疆 何用不藏 藏 爭心塞淵

曰來厥章 以介眉壽 下壽世疆

六十生辰用五十自壽詩韻述意

粹天壽齋堂壽言 載焉

六十縣孤日應知筋力微 聖恩無復棄衰病 未曾歸  
夙昔甘盤舊流年 蓬瓊非羞將 雙鬢白漫自照 綵衣

右外易水翁之下以爲詞

○天壽堂壽言 白石六十壽偕君所賀詩篇也 藏于滄洲家

滄洲郡邑考

白石先生著 滄容軒父述

白石先生學訓

容軒原義和輯 滄洲原義贊按

白石先生詩範

白石先生答問書

瀛洲原義路輯

白石先生手簡錄

新井原義路輯

白石先生詩解

同

白石先生遺文

容軒原義和甫纂 男原義贊說 孫原義路重輯

○白雅帖序

孫子諤解序

停雲集序

高子觀游序

霧島獄記

日向高十樓之筆

阿菴山之記

肥後 富士獄記 駿河 塩

竈松島圖志

仙臺 塩竈社考文

那須國造碑跋 那須國

造碑字秋文

賈向事辨 排佛論

以上子正家所藏白石著述 刊稿本有年為校按并局

貧家讀書子常苦力 藏卷富家讀書子常中苦多 歡  
書貧富二家子少長 讀一書所見還深淺 果是非其書讀  
書聊復爾况又難於書 讀書行之始故要博涉 君子

百行者不愧所讀書讀昏能若此始為能讀書為告讀  
書人尚其能讀書 子方子士の子息とく書讀  
カア子行へ具へて人子行らぬとく書物おもふとの  
カウ山浦のふたりのとくをゆりての号五員

室鳩巢

諱且清字師礼一字汝玉東都人号滄浪一号敬所宅在質州有城西名鳩巢故以稱焉其先食邑備中

文昭廟道中作

鳩巢漫書

萬戶曙開長樂鐘王侯車馬陌頭逢  
鴛鴦瓦暖日華動鳧雁水明城影重  
西内春催原廟草南山雲繞茂陵松  
百年礼樂後天下空對丘阿思 祖宗

江南春意

高樓朱箔霽餘輝湘水東流雁北飛  
君淚為君題錦字看眉知妾濕羅衣  
桃花如雨紅初落楊柳似絲綠四圍  
春色祗今無限好不知老在幾時回

送友人歸家

以上半書而踏空軒翁之作意者其所自撰之詩句調頗可故今併錄外有紅梅在下吟詩

秋原何浩々征旆去悠々  
暮氣徐君劍風霜季子衣  
漁家臨海小鳥道傍山  
幽客強基友知吾口日白頭  
木竹軒 氏木下偉宣亮稱平三郎字汝弼号菊潭又号竹軒恭靖先生之子也正德辛卯唱和韓使有班荆集行于世  
奉呈正便謙齋趙公

龍節光揚若木津清風滿道拂行塵  
跟珠爭覩三不客鳴

佩先迎先一人秉國鉤鈞銚品藻出修鄰寶席奇珍寶迹

莫向白珩在屹立玉山照映新

再依然答嘗百軒區伯

曰三首上鳩巢因故書下租南

新詩須付雪兒歌羅出千章錦水波惟待吾方區痼

疾烟霞霞泉子之辭何多

抵南海氏祖國生原各籍一樟心卿字伯玉一字斌紀存文字

律自首大所稱尋秋分寓午初未夜半賦百首前後二百篇無

去歲翰林新并之身使赴西京臨行賦一絕以留為賦也僻在

腰下寶刀光照銀胸中策卷目無人采時爭覩歸時望誰識

人間有鳳麟韓客唱剛入咳走字呈高滿天君

翻：儀鳳集江干泰斗高名獨仰韓字業千年傳領袖

文章千代見衣冠從橫健筆即穿草字空轉華音珠走

盤地西鴻臚屢相接汪、只覺寸心寬

東風玉笛起誰家微月沈、北斗斜曲裡不知春暗盡

江南何處落梅花

高天倚深見玄仙字子新稱新右門号天倚又号路山老人長倚人

一山所撰賴賢碑世無摺本爭欲見之非一日矣近得香

國禪師方便力述夫同徽老丈臨取遺為果善物也

老丈王資素高好筆研宜半世之所尚予不敢默已

一言致謝云并正

苔鎖雲封四百年屹然如岸左無遷賢師遠觀天南鏡

妙覺空華口吐蓮一字一備功用普隨形隨草筆端



圓淮教巧奪神司工手直把老仙面目傳

仙臺宮城八景

并引

略洞若丘老翁手畫仙臺宮城八景索予題詩之今第百首

渺然無際林上原秋天上桂枝月下秋千石錦叢綉不

右宮城秋月

木下晚鐘

本荒夜雨

榴岡夕照

玉田落雁

青葉晴嵐

松浦歸帆

多賀暮雪

鹽竈八景詩并引

東奧國叔弟肥州君向者蒙示仙臺各所和歌集一

本乃太守羽林公手書也內有鹽竈八景之詠予素

不解和歌漫效其詠敢綴俚言八絕未必無疵繆而背其

題之意幸為統賜削正

享和庚子季秋

武城晚字高玄仙神竹

蒼海為墟竈為神學烟裏處認前津漁舟泛風波穩橫邊

一聲滿浦春

右鹽竈浦船

坐得堂外望斜曛旅雁相呼御島群春徃秋歸天路遠

回峰一却又衝雲

右雄嶋旅雁

觀瀾亭外滿天秋月是崎前月正浮脈金波蕩漾去賞

心把得一杯留

右月是清月

霜和鐘聲遍枕寒夢隨曉色覺猶殘隔溪蕭寺如何

必念思凝然絕兩端

右蕭寺曉鐘

千家浦北一宮難島上神祠永不移夕照由他斜隔斷綠波

匝射光暉

右難島夕照

豈若羅浮泛海高老松濃翠響波濤臨風眺望無源

鹽竈浦邊獨駕鰲

右浮島翠松

漁家正坐戶接為隣篝火終宵照海濱捕得魚時換酒去一

方聚樂每相親

右海濱漁火

三浦入江芳色催富山照映雪為堆曾聞頂上一相望

依然兩眼回

右富山暮雪

平霞洲

氏土肥樟元成字允仲一號新川以其先世越中大姓擬有新川之地東武人六才賦詩常原義公觀以為奇文有階節之

日召對講論洛中庸方之書論其甚明兼能書時年十一正德年

中應酬韓使有柔後唱和集行于世

謹和東陸洞巖翁吳我源師白石韻二首

文星之映玉山頰風滿白揚心自驚華表有誰看鶴化  
惟無復聽野鳴盛名未達雲霄志暮景何處紅燈  
里置留徐孺在又因相儼志平生  
双侯途思以水飲也天池以夢先驚吾煙海古去風  
王孫也折雨晴山後好子他日與山陽笛裡友  
情孤魂不歸才不氣佳足已改明月生

思君恩

君恩如滿月夜減圓形善心若春草十日一上階青

中秋值雨天錫堂小集此夜三更後月蝕

滿城雨色未全收河漢無聲月宇幽落木清鐘山寺暮歸雲  
斷角水橫秋銀燈風暗候蟲多玉杵霜凍旅雁愁莫問  
寒灰埋半夜兼葭白露踏喜同遊

洞巖老人傳略

新川平元所識

○是洞巖之銘于白石、年老顧命新川代作焉者事長故今略  
其略曰時有松竹堂主人者性木老以工書鳴于京師君千里師焉

安澹泊

姓安積諱覺字子先号老圃  
一稱澹泊齋水府文學

和白石先生謝陸奧故人湖莊惠美豆小島松葉詩 老圃安覺

一枝蒼鬢寄微香為羨名區仔細尋  
遼海無塵千里靜蓬萊有路五深雲  
襜褕應感美人贈木柿還看好事心  
借問風流旧知己幾時乘興訪山陰  
自注云予六旬用能因長柄橋柿而  
未審未當否

以上抄懷符類編上卷

仙翁傳負新井文路者即佐洞岩氏之孫之家于今猶多

藏之賢之送墨子正其教切輯為三卷名以各世類  
類編重和矣矣後何出於所傳覽于予之

敬請知者此紙係元朝臣所寫之  
據利時人烟則以日劫中散也據此則地以地而地  
有精而而學其大略物也云臣始及以地而地  
以大地而地地地地

臣等知者此紙係元朝臣所寫之  
據利時人烟則以日劫中散也據此則地以地而地  
有精而而學其大略物也云臣始及以地而地  
以大地而地地地地

臣等知者此紙係元朝臣所寫之  
據利時人烟則以日劫中散也據此則地以地而地  
有精而而學其大略物也云臣始及以地而地  
以大地而地地地地

臣等知者此紙係元朝臣所寫之  
據利時人烟則以日劫中散也據此則地以地而地  
有精而而學其大略物也云臣始及以地而地  
以大地而地地地地

とる生を流る祀

名山左夫輔亮板

一 行徳の徳りやりのるはなまてむりしる  
のりるの事子著つるさ其事未減るは何  
のふりも入るさぬを遠にちる事秘るも秘傳の  
冬うさふははをなぬ有はとかしも秘解の  
いふいむりしる事ひもあまて初唐成唐の徳を  
流神まよひしる事なるらよる事いふも味とさ  
事ていふ白抄もいふ事の事いふ事もたれは  
事とわく事とく洞くく事とてきて一徳の  
事とく事の徳とわく事とく事とく事とく事とく

命の流るる所をのぼりて  
久よりの事よし  
わたりきなるもの  
し中よりの事よし  
るもの事よし  
古風柳は再びあせり  
い中よりの事よし  
性情よきもの事よし  
らしき事よし  
かの胸中の事よし

もの事よし  
あつたもの事よし  
ゆと流るるもの事よし  
ちよりの事よし  
又よりの事よし  
の事よし  
もあつたもの事よし  
うりよりの事よし  
け事よし  
はよりの事よし



香しき花とすすめぬ油はなるりあり  
上よしの花はなるの身はなるまはるは花  
よ似あるとくはなる人種は  
なるのそくはなるのまはるは  
人を教わるはなるのまはるは  
手は種はなるはなるはなるは  
みよなるはなるはなるはなるは  
あはなるはなるはなるはなるは  
もよなるはなるはなるはなるは  
なるはなるはなるはなるは

くまなるはなるはなるはなるは  
今花の事多そ念はなるはなるは  
もよなるはなるはなるはなるは  
きよなるはなるはなるはなるは  
もよなるはなるはなるはなるは  
らなるはなるはなるはなるは  
みよなるはなるはなるはなるは  
はなるはなるはなるはなるは  
たなるはなるはなるはなるは  
ゆはなるはなるはなるはなるは

予不才を以て人まを枯あらしめし地元のあまは  
 ちし南朝の歌なりし中朝の歌なりしとて申  
 のは向背なくも昔の歌のなるやまを以て謝  
 玄八郎山の捷のより少少かきち敵とやせり  
 予謙言る所の歌のりうを似之れ武  
 花柳の歌のり似之れ歌を判限するは義  
 家義興のりといはるるに似之れ義家義興の  
 るる事を見れば著るとのあいさつふをるるべ  
 くといふ事には當時日陰春のりやまは比  
 らしはしきまこと七八のりやまの風俗

一下まのり——のりやまのりやまのりやまのりやま  
 とはいふ事につらひるるるるるるるるるる  
 るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
 挨拶のお趣——のりやまのりやまのりやまのりやま  
 中の風俗のりやまのりやまのりやまのりやまのりやま  
 まのりやまのりやまのりやまのりやまのりやまのりやま  
 るるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

三和東陸源子嚴春初韻 踏曰餘稿題如此所  
賜直蹟作辛丑上  
已和洞巖源老春初作 厚并類編  
 武昌揚柳動春城東望長流獨拳觥曾識地  
 軍驚鶴唳又聞南渡舞雞聲當年脩禊蘭亭



集此日歸田栗里情不忍王孫無限思汀洲芳  
 艸向誰生 自注云子嚴先世有功于南朝云子嚴  
 善書今年乞骸而歸  
 右白石先生所贈余家君詩也為考先生用事  
 之義今附記于此云 源義賢

天祐年中以被感不活及為表并送

名儀教及之 作出採春之侍の候約以用ひ流  
 仰出氣の世上二被花負増也一なる山と表去此  
 中七右の信ひ美るる手重の成以人出物入等  
 分名は中世中もまふ並一外事之失墜多く町表  
 其子年頃子入用子成心と不意とて出業し障  
 付候約は内方被出制南に必は其感も出の時多  
 之上もその人其情とるし有之以下くも多し時路  
 つき自然と中世之形等と失ひ存し世法も其後  
 日月義の移替も其又た了極るまで一教及候出  
 心は世も其日ありと其記下り物と上り心







もし及者終に余を言ふよりありしむたに准をみあふ  
ちり廿一計之業は名に如地之に取物は既經定を  
濃味と求常取はるが内知者之に物は兼業に上之同  
るに字は取れし勿備とるに後者言ふに并南は来し  
向ふとて公とも内強するに法をのめり

一 倭國の親戚不可為後進する物にうらなり

此親戚は人の物に物に其も信守におりしりは是を  
律に用はる不可用と法を辨るに由たしおるは  
物にてもは法を法に物に是を法に用はる物に

一 自己の佛より華にふり物

一 後進堂は法を法に物に或は法をの好に物に  
似たる事業は然し法を法に物に物に

一 切の物にふり

一 使解便信にたる可法下りたるに法を信に

一 倭國の親戚不可

一 而に法を法に物に或は法をの好に物に

一 不常信するに付るに法をの好に物に  
るに親戚は法を法に物に

此書は日本文書に内文或は名とふと初之外は  
字を以て法に法に法に法に法に法に法に法に  
すのめを法に法に法に法に法に法に法に法に

一 倭國の親戚不可

たし法に法に法に法に法に法に法に法に  
法に法に法に法に法に法に法に法に法に

安永二年三月廿六

五言古

述懷

一作出關疑當作出關述懷

薊丘覽古

驅馬——訓解說非也

子夜吳歌

五句平字妙

經下邳圯橋

此人——此人張良云黄石公云非也

玉華宮

秋色正蕭灑ノ句不用ノ句ニシテ詩ノ緩ミト  
大ル妙

七言古

長安古意

娼婦、金屈膝、知レカル、金具ノ作法

短歌行

王帝酒酣、十一字句トナシテアレモ四言七  
言之意

飲中八仙歌

邯鄲少年行

崔五丈圍屏風

帝京篇

五言律

晚次樂鄉縣

春夜別友人

觀獵

醉後

此詩一首テ作シハ有ヘカラスニ句三句ワ、作シ  
ラ後ニ集シモノナシ故無反字前後ラウケズ  
平原君趙勝也訓解引朱建者非也

錢鞘金環

能相向以為証

趙季徑過密趙季ハ何人ト云フヲ不知文選ノ注ヲナ  
セシ季善スヲ不知ト云ヘリ只趙氏季氏ノ親交ト見ツシ

樂鄉縣ハ南方ニアリ注解注非也征ノ字カ有ヨツ  
テ後軍ト見タ全ク不然只乱後ノ射ヲ作

銀燭ハ友人ノ送ラル、ユヘリツハ三云ニ結構ナル蠟  
燭ト云フナリ訓解注非也

回看鷓鴣射 鷓鴣訓解注非也

能更一、只幾度ホド醉ハルト云意訓解非〇世上、訓  
解注非也世上ノ者カ交不深ニメツタニ相識ト云ガ常一通リノ

者ノ知ル所テナイ吾計リ知テ居ル

送遠

別レテ後ニ詩ヲ贈詩

玉臺觀

蕭史駐ハラニナヅニ彫物ナドアルヘシ

同王徵君

旅ニ来テ居リ見レハ書物モ見ラレ又故酒デモ  
飲カヨイナリ 訓解白明方非覽書時說非

五言排律

靈隱寺

此詩有說詳出訓解

在唐

遷宮訓解說是然レモ吾ラカケテ可見

奉和幸韋嗣立山莊

坐情、一、句訓解天子ニカクルハ非嗣立  
ニカケテ見ツヘシ

奉和晦日幸昆明池

名詩說在訓解

奉和聖製途經華嶽

舊廟...新碑...  
下非ナリ

後行次昭陵

直詞寧...賢路不...以下註非ナリ起句へ立  
及リテ太宗ノ功ヲ稱スルナリ

前送秘書晁監

平生公略シテ晁監ニト云ユヘ秘書監ヲ  
中分シテ秘書晁監ト云

七言律

古意

木葉ノ出処ガアル非ナリ

再入道場

看顯日月...當是勅額之類

奉和聖製

留春疑當商名

奉和春日

此詩註非ナリ

和左司馬

五六ニテ是ナリ以下ノ  
註非ナリ

登金陵鳳皇臺

使ト云字ニツイテ元美カ詩話ニハムツカシ  
ウ論シテアレ氏服子ハトラレズ

送魏萬

一二ノ句注  
非ナリ

宣政殿

起句注非ナリ

曲江對酒

二三ノ句注  
非ナリ

秋興三

帝ノ仙人ニ迷ラ譏ト云  
説非ナリ

同四

玄宗ノ軍ヲナスヲ譏  
ノ作ト云非ナリ

自鞏洛舟行

題ヲ  
知ラ

五言絕句

鹽州

三四ノ句注非

登柳州

融州ハ公ノ故  
郷ナリ注非

尋隱者不遇

皆童子ノコ  
久ト云説非

七言絕句

戲贈趙

兼テ知りタル人ナルヘシ故ニ詩ヲ贈ル  
ナラン

涼州詞

此詩ヨリ涼州ノ道具ヲソロヘシナリ各詩



春宮曲

宮怨ナリ。○露井ハ禁中廣キユハ処々有落簡所カリト  
リユヘニ落簡ヲ名付テ露井ト云ナルベシ。○高ノ字夜  
更ノカタキ

從軍行

烽火一一金圍ヲ禁中トナスハ非ナリタゞ子マト見  
ルベシ

逢入京使

平安我ハナハダ故郷ヲ案スルユハ度々平安ト云  
テ贈レト云テクレラレヨ

贈花卿

一妓女ナリ注非ナリ

解悶

此待ハ千トムツカシイ解悶ノ詩ニナリカヌル

江南行

鳳皇字左傳ナリノ字ニテ他國ニ行キアラタ妻  
ヲ娶シラ云山ノ字ハ顛字ユハ用ヒシナリ

楓橋夜泊

名詩三體詩ナドニイセ、説アレ氏○旅ニ居テ夜  
中ノ目覺テ夜明ノ如クミヘシユハ是ハ夜ノ明シ  
カト思フ処ニ鍾聲ガ聞ヘシ故ニ數ヘテ見  
ル夜中ニ

送盧一

注非ナリ

漢宮詞

宮怨ナリ

涼州歌

第一 注非也

僧院

淋敷ヲラク末ニタニギマカナルヲ云  
妙也サニシキヲバカリテハ詩ガ偏枯ト  
ナル

以上之況因美達志

各美ト字植卿  
依名因村有之如  
提其如師

余賢者

各賢字  
号龜澤

而予之貧賈得法吾

南郭子云

文化ニ云五仲友ナク激

